



海外リポート

ブラジル生活雑感

中野敬三*

はじめに

私は81年9月に、古河電工ブラジルに出向し、被覆電線事業部設立に参画して85年2月迄の4年半、家族と共にブラジルに滞在しました。

ブラジルは、リオのカーニバル、アマゾン、サッカー、日系移民等で日本人に馴染みのある国です。また“奇跡のブラジル”と言われた70年代の経済開発時期には、日本でもブラジルブームが起こり、多数の日本企業がブラジルに進出しました。サンパウロ日本人学校には、それら企業に勤める長期滞在者の子弟が、小中学合わせてピークには千人近くいましたが、最近は経済停滞の煽りを受けて、企業の縮小、撤退、あるいは現地化の促進により、700人までに減少しています。ブラジルは地球の真反対側に位置して、日本から最も遠い国でもあり、日本とブラジル間の観光ルートが未整備である事もあって、日系企業関係者以外の一般旅行者は少ないので、馴染みのある割には、実態が良く知られていない国の1つとも言えます。

古河電工ブラジルについて

古河電工ブラジルは、アルミ高圧送電線メーカーであった米国資本のカイザーアルミブラジルを、74年に古河電工と三井物産の共同出資で買収して設立し、その後、通信ケーブル工場及び被覆電線工場を建設しました。84年で設立10年となり、従業員850名、年間売上高150億円でブラジルで第2位の総合電線メーカーに成長しています。米国系ブラジル企業の歴史に日系の血を注入した結果、米伯日三国をミックスした

雰囲気を持っており、従業員もポルトガル系、ドイツ系、アラブ系、イタリア系、日系等、国際色に富んでいます。

進出企業の幹部クラスは、親会社からの派遣者で大部分占められるケースが多いのですが、古河電工ブラジルの場合は、社長と2人の副社長のうち1人は派遣者ですが、それ以外の取締役、部長の大部分はブラジル人となっています。そして派遣者（技術系中心）の大部分は副部長、または課長としてブラジル人部長を補佐しつつ、若手ブラジル人に対して身を持って教育と技術移転を進める方式をとっています。その結果、技術部門では、日本の技術と考え方をベースに育ったブラジル人課長が多数生れてきています。進出企業で常に問題となる“現地化”の一方法として、現地日系企業の中で注目されつつあります。

ブラジル人種と人種偏見

ブラジルは、インドを目指したポルトガル人によって1500年に発見され、1530年よりポルトガル新領土として植民が開始されたため、中南米で唯一のポルトガル語国となっています。

最初はインディオ、次にポルトガル人が渡来し、強制移住のアフリカ黒人（ドレイ）が加えられ、その後ヨーロッパ移民、20世紀初頭から日本移民が加わるという経緯を経て形成された融合民族ですので、ブラジル人はいてもブラジル民族はいません。当初から混血が進んだためブラジルには人種偏見がないと一般に言われ、日本の知識人の中にブラジルこそ未来の世界の姿だと惚れ込んでいる人がいます。私の知人にもいましたが、一見白人のポルトガル人系夫婦から、1人は半黒の子供、1人はアングロサクソン系白人の子供が生まれる事もあり、うっかり人種偏見は出せないという事情もあるでしょ

*中野敬三 (Keizo NAKANO), 古河電気工業㈱, 電力事業本部技術部, 部長補佐, 学士 (基礎工学部), 合成化学

う。しかし、私のブラジル滞在中に出会った企業、役所の管理者クラスに、半黒、黒の人は1人も居ませんでした。また、大都市圏の最下層労働者には、黒人の比率が非常に高いのが実態です。

日系人は真面目さ、正直さと、移民の方達の血と涙と汗の努力が評価され、日常生活で人種偏見を感じることはまずないと言われていきます。しかし、高級軍人に日系人はいません。独裁権力をふるったガイゼル大統領の秘蔵っ子として、ブラジル最大企業の石油公社総裁まで登りつめた日系2世は、大統領府がEC大使に任命を内定したのに終々上院の承認が得られなかった出来事は昨年の事です。大使は国の顔だからだと思います。同じ人種の坩堝である米国ほど人種問題を抱えていないのは事実ですが、米国に存在する黒人の政府高官、大学教授の如き高級知識人、大金持（スポーツ、芸能関係除く）は、ブラジルには皆無に近いのです。人種偏見の有無は微妙なものがあり、一概には言えないと痛感しました。

ブラジル人気質

国土の広さは日本の23倍で、その大部分は赤道と南回帰線の間にあります。南部では霜や時には雪が降ります。人口1億2千万人ですが、50%近くは、東南部4州に集中しており、最大の都市サンパウロ市の人口は1千万人を越えます。ブラジルにも江戸っ子や浪花っ子、そして“ダサイ”と同類の言葉があります。一部ご紹介いたします。

“カリオカ”……観光と政治の町、リオデジャネイロの人達。“ネアカ”で楽しいが、調子が良すぎるし、あまり働かない。

“パウリスタ”……商工業の中心、サンパウロの人達。勤勉だが野暮、コセコセしている。

“ミネイロ”……歴史と鉱工業のミナスジェライス州の人達。着実だが保守的、頑固。

“バイアノ”……北部亜熱帯バイア州の人達。使われ方によっては、ノロマ、馬鹿、怠け者等、最高の蔑称となる。

カリオカ、パウリスタ、ミネイロとは、一緒に仕事をしましたが、言い得て妙な呼称だと実

感しました。ブラジル人気質を一言で述べるのは困難ですが、誇り高く、楽天的、親切、そして比較的勤労意欲が高いと言えます。誇り高さと楽天的な所は、ある時は極めて保守的になったり、ある時は日本人には真似が出来ない様な巨大プロジェクト（世界最大のイタイプ発電所、不毛の高原に建設した新首都ブラジリア、等）を実行する“すごさ”となって現われます。巨額の対外債務を抱える国として、メキシコとブラジルが最右翼ですが、両国を良く知っている日本と米国のビジネスマンとたまたま話をした際、どちらの人も「メキシコは石油を持っているが、民族性、人的資源に問題がある。ブラジルは資源もあるが、メキシコに比べて人的資源の質に於て、はるかにすぐれているので将来性が高い」と口を揃えて言っていたのが強く印象に残っています。

ハイパーインフレ

年間230%のインフレと、1千億ドルを越える世界最大の対外債務は有名です。1年間で値段が3倍になるインフレは、終戦直後の日本を体験した人以外の日本人の理解を越えます。

ブラジルのインフレは慢性的公共赤字、補助金負担、輸入インフレ等が集積して相互再発を繰り返す構造インフレと言われていきます。ブラジルの経済、財政、金融政策の特徴として、通貨調整システム（コレソン・モネタリア）があります。政府が定期的に公表する調整指数（インデックス）に基づいて、国債価格、融資金、賃金、物価等、経済全般にわたって時価修正が行われます。64年に高インフレによる歪みを除去するため導入され、その時点では世界で最良の政策であるとブラジル人は自画自賛していましたが、逆にインフレとの共存を可能としたため、低成長期に入ってもインフレの歯止めがきかなくなりました。最近、デス・インデクセーションが叫ばれ、部分的に実施されつつありますが、20年の歴史を一挙にくつがえすのは容易ではなく、社会不安の一因にもなっています。200%という数字は、日本で言うインフレ率とは性格も背景も全く異なっていると言えます。企業や個人破産の続出、失業率増大、給与水準

の低下等、経済悪化、及びそれに伴う社会情勢の悪化は顕著ですが、一方では、スーパーマーケットには相変わらず商品があふれ、品質は目に見えて向上していますし、販売台数が減少したと言いつつも、どんどん新車が発売され、石油自給率が50%に上昇し、そして中進国では有数の武器輸出国となり、国としての懐の深さと、したたかさに感心させられます。これらの事は新聞等の報道や、発表される統計数字のみでは窺い知れず、実際に生活してのみわかる事だとも言えます。

200%のインフレ下では、1カ月間タンス預金すると、10%減価しますので、企業も個人も財テクに努めねばなりません。価値修正付預金がその1つですが、証券、株式、闇ドル、金、不動産等さまざまな所に資金が流れ、相互に移動します。大金ならともかく、給料の一部程度の小金をブラジル人のようにきめ細かく動かすことは、私達外国人にはとても出来ませんし、もともと日本で財テクの経験のない安サラリーマンですから給料が出たらすぐに、1カ月の生活用品や食料をまとめて買い込むとか、少しまとまったら闇ドルを買う位が精々で、目減りの防止策としては不十分であったと言わざるを得ません。最低、月に1回は商品の値札が書き換えられますので、それが高いのか、安いのかを判断するのは容易ではありません。円/米国ドル/クルゼイロ（ブラジル通貨）のレートからはじまって、新聞に発表される様々な物価に係る指数を商品の値段の時系列変化、等の組み合わせによってのみ正確な判断が出来るのですが、いちいち、そんな面倒な作業は出来ませんので、結果的には何時も高い物を掴んでいるのではないかと疑いつつ買物をする破目に陥る訳です。日本では、家計は妻がコントロールするのが普通ですが、私達駐在員の殆んどは家庭

では、夫が財布を握らざるを得ず、そして、日曜日はレストラン以外の商店は全て営業しませんので、土曜日は概ね買物で日が暮れるのが通常パターンです。

おわりに

2月末に帰国以来、日本での仕事と生活の再スタートのため、目の回るような忙しきで4カ月が瞬く間に経ちました。その間、日本の商品の品質のすばらしさと、過度とも思える程の種類と量の多さに感心し、日本の強さの一端を実感しながらも、国の豊さ、生活の豊さとは何だろうかと、ふと思ったりすることがあります。

サンパウロ市は日系人が多いので、東洋人街に行くと日本食は簡単に食べられますが、帰国後食べた日本食は、流石に“本場”の旨さがあると、妙な感心の仕方をしたのですが、ブラジルでは時々、屋外で串刺しにした数kgの肉の塊を炭火で焼き、ナイフで切り取りながら食べるパーティー（シュラスコ・パーティーと言う）をしましたが、これは日本では望むべくもありません。

また、時間に追いかけられた仕事の合間に出掛けた小旅行で見たブラジルの風景、サンパウロから約200kmの距離にあり、日系人の間では“サンパウロの軽井沢”と言われている“カンポスト・ド・ジョルダン”のヨーロッパ風の町並みの素晴らしき、州立自然公園の空気の旨さと空の青さ、大西洋岸で無限に白砂が続く“カーボ・フリオ海岸”の夕焼け等も懐しく思い出されます。10年先か、20年先か、今度は仕事ではなくブラジルを訪れ、シュラスコを食べ、ピング（サトウキビで作った蒸留酒で、最も代表的なブラジルの酒）を飲みながら、ブラジル人の友人達（アミーゴ）と、愉快的な時を過ごす機会を持つのが夢となっています。